

26年10月研修会
「磯長谷の梅鉢御陵を訪ねる」

資 料

奈良・人と自然の会

歴史文化クラブ

(10月8日)

行程表

8 : 30 奈良駅出発 西名阪有料道路 香芝 IC 経由

(車中解説)

9 : 30 案内人と合流

壺井八幡入口へ・・・壺井八幡・通法寺跡・源氏3代墓を見学
徒歩約50分

10 : 20 敏達天皇陵着・・・徒歩往復約20分

11 : 00 葉室古墳公園着・・・見学と昼食 約40分

12 : 00 推古天皇陵着・・・・推古天皇陵・二子塚古墳 徒歩約30分

12 : 40 磯長神社着・・・・磯長神社・小野妹子墓 約10分

(車窓より見学) 用明天皇陵

13 : 00 叡福寺P着・・・・叡福寺・聖徳太子御廟 約40分

案内人はここまで

14 : 00 出発

14 : 20 近つ飛鳥博物館・・・秋季特別展示と自由見学 約50分

15 : 10 帰途に就く

17 : 00 近鉄奈良駅着

しながだに 磯長谷について

二上山の山麓から西の石川の流域にかけて広がる磯長谷から羽曳野市駒谷にかけての谷地は「河内飛鳥」もしくは「近つ飛鳥」と呼ばれ、古墳時代中期以降、朝鮮半島から渡来した多くの技術者が定住した。この地は古代有力豪族の勢力下であり、磯長（しなが）の地名は族息長（おきなが）氏に因むものと言われ、太子町役場北の『春日』の地名は和邇氏の、役所南の『山田』は蘇我氏の根拠地であったことを示すと言われている。

6世紀から7世紀にかけて皇室の外戚となった蘇我氏は、磯長谷を奈良飛鳥と並ぶ根拠地として支配した。この谷に蘇我氏の姻戚となる天皇（敏達、用明、推古、孝徳）の御陵が集まり「王陵の谷」と呼ばれ、聖徳太子廟と併せて5つの陵墓が梅鉢の形に分布していることから「梅鉢御陵」の名で親しまれている。

また石川の流域は、平安時代、石川源氏発祥の地で、総氏神の壺井八幡と、著名な八幡太郎義家ら源氏の棟梁3代の墓と菩提寺の通法寺跡がある。

歴史豊かな太子町へのいざない

(太子町教育委員会 生涯学習課ご提供)

壺井八幡宮

康平7年(1064)に前九年の役の戦勝凱旋した源頼義と義家父子が、香呂峰の私邸の東側に社殿を造営し、河内源氏の氏神である石清水八幡宮の神霊を勧請したのが始まりで、これより壺井八幡宮が武家源氏棟梁の河内源氏の総氏神となりました。

この壺井の一带は寛仁4年(1020)に清和源氏の多田満仲の三男、源頼信が河内国国司に任ぜられて以来居住した土地で、以後頼義と義家3代に渡って居住し、頼朝が鎌倉幕府を開き鶴岡八幡宮を勧請するまで源氏棟梁の総氏神となった。

通法寺跡

長久4年(1043)に源頼義が居館の南に精舎を建立したことに始まるという。また一説には、源頼信が草庵として創建し、頼義が前九年の役後に源氏の菩提寺として造営したともいわれます。のち荒廃し江戸時代、元禄13年(1700)に徳川綱吉が再建します。『河内名所図会』には本堂・観音堂・鎮守・拝殿などがあった様子がえがかれています。

源家三代墓(源頼信墓・源頼義墓・源義家墓)

清和天皇—貞純親王—源経基—多田満仲—源頼信墓—源頼義墓—源義家

源頼信墓

寛仁4年(1020)に河内国国司となり、永承3年(1048)74歳で没した。その以外は通法寺の巽の山上へ葬られたといわれる。

その墳墓とされる塚は丘陵の頂に築かれた、直径13メートル、高さ3.5メートルの円墳で周囲には堀状の溝がめぐる。

源頼義墓

前九年の役で奥州安倍氏を追討し、この地へ凱旋し康平6年(1063)に壺井と改め石清水八幡宮を勧請した。永保2年(1082)に88歳で死去し、遺骸は遺言により通法寺本堂下に埋葬されました。

墳墓と伝える場所は境内の西側にあり、東西9メートル、南北12メートルの石垣基壇の中央にわずかな高まりが残ります。

源義家

長暦2年(1038)頼義の次男として生まれ、石清水八幡宮で元服し八幡太郎と呼ばれた。長治2年(1105)に68歳で死去した。

墳墓と伝える塚は円形で、直径17メートル、高さ5メートルで3代のうちもっとも大きなものです。

泥掛地蔵

蓮華座の上に半肉彫りされた地蔵立像で高さ 1.4 メートルの大きなものです。その形式から中世末から近世初頭のものと考えられています。

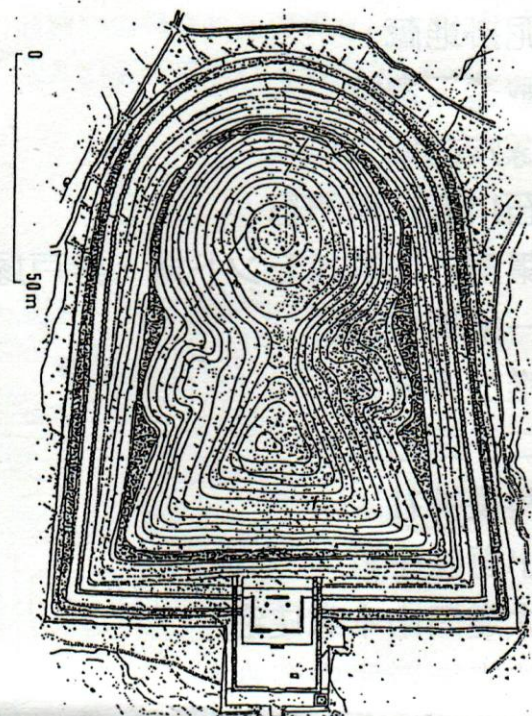
その名の由来は文字通り泥をかけてお祈りすることによりますが、伝えによると物部守屋に追われた聖徳太子がこの地の大木に身をひそめて守屋を打ち滅ぼし、その近くに人助けをするようにと守屋の像を作って祭ったため、人々は仏敵として泥をかけるようになったという。また一説には、腫れ物のできた子を思う母の夢枕に、祈り続けた地蔵が立ち、蓮池の泥をわが身にかければ願いがかなうと告げたともいわれます。

この地蔵が立つ地は西之口といい、叡福寺の西総門にあたり聖徳太子御廟を訪れる旅人がここを多く行き交いました。泥をかけられる地蔵さんが仏敵守屋と重なったのかもしれませんが。

敏達天皇陵

第 30 代敏達天皇は欽明天皇の皇子で、572年に即位し、百濟大井に宮を置き、後に大和の訳語田に移ります。当時朝鮮半島では任那日本府が滅亡し、また国内では仏教の受け入れをめぐる大臣蘇我氏と大連物部氏の対立によって混乱した時代でした。在位 14 年、48 歳でなくなり、591 年に母である石姫皇后の磯長の陵に追葬されました。

敏達天皇陵は前方後円墳で、南方から伸びる尾根上にあり、全長 93 メートル、前方部の幅 70 メートル、高さ 12 メートルで、後円部直径 56 メートル、高さ 11.5 メートルの規模があります。墳丘は 2 段でくびれ部分には造り出しがあります。内部構造は不明ですが、墳丘や参道付近で 6 世紀前半ころのものと考えられる、もっとも新しい形態の埴輪片が採集されています。

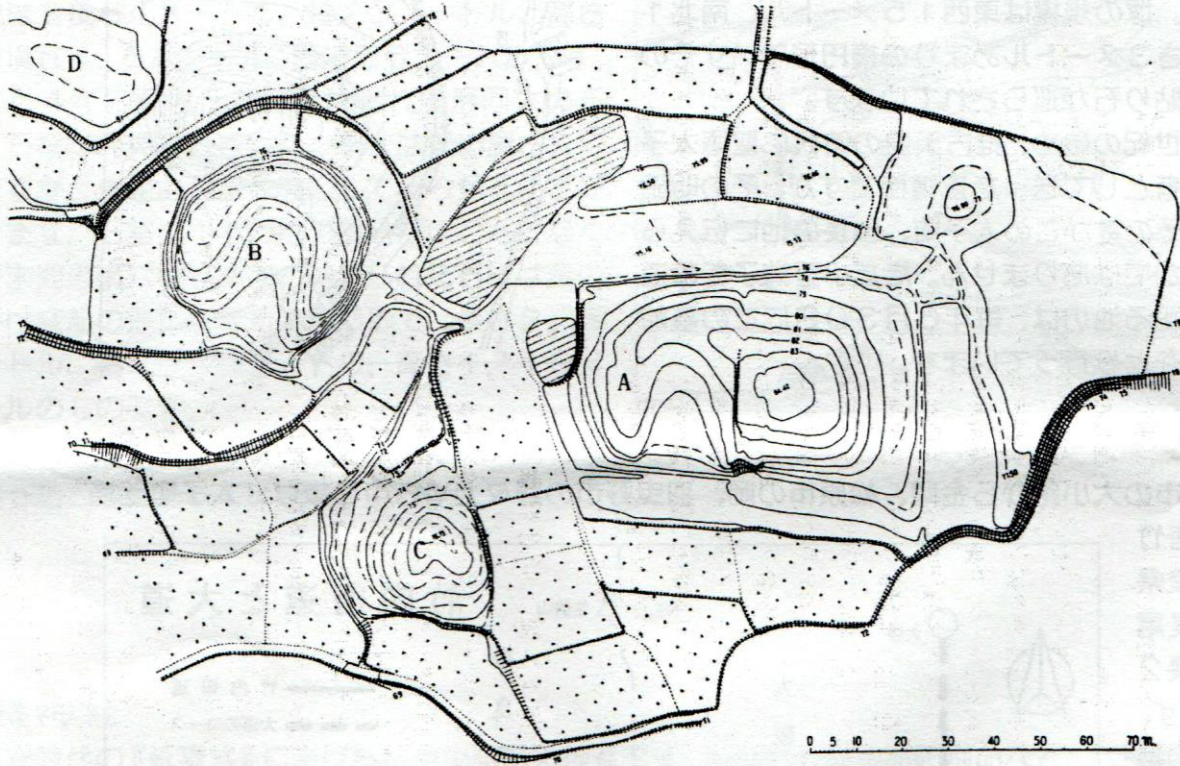


石川五右衛門石

大きな 2 つの石がそうよばれるもので、昔この近くに隠れ住んでいた大泥棒石川五右衛門がめったに踏まないドジを踏んだときに命からがら逃げ帰りこの石で休み、そのとき腹立ち紛れにコブシで石を殴りつけたときについた跡が、少しへこんだ跡として残っていると伝えられます。

「石川や 浜の真砂は 尽きるとも 世に盗人の 種は尽きまじ」

葉室古墳群（モンド塚・釜戸塚・石塚・葉室塚）

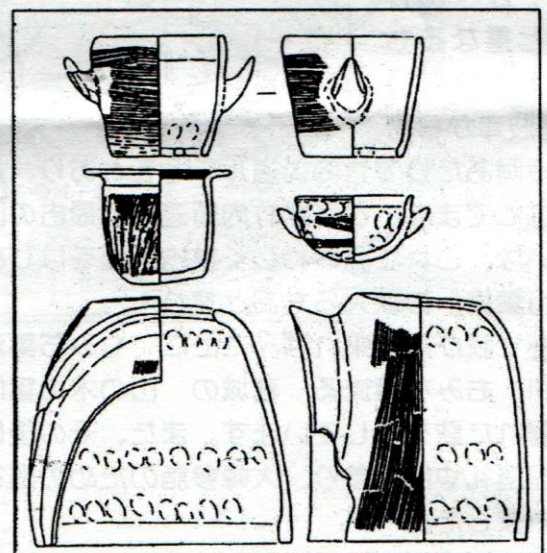


一須賀古墳群

太子町から河南町のまたがる丘陵の尾根に分布する一須賀古墳群は古墳時代後期から終末期にあたる6世紀中頃から7世紀前半にかけて築造された古墳群で、10数メートル程度の小規模の古墳が、数基から10数基の単位をなし、およそ200基密集しています。

これは一部の首長層だけでなく、より多くの有力家族層にまで古墳の築造が行われた結果と考えられています。古墳の群集する単位や墓道などを分析することによって古墳時代の集団関係を垣間見ることができます。

古墳の多くは横穴式石室を持ち、内部には凝灰岩の石棺や木棺が1から3つ納められており、副葬品と



して須恵器や土師器の土器のほか武器や馬具、装身具類を収めたものもあります。中には大陸からもたらされた、金銅製の杵や垂飾付耳飾やカマドや甑、甕のミニチュア炊飯具のセットといった朝鮮半島の習慣を模したのもみられます。

一須賀古墳群は大陸や朝鮮半島の影響がうかがえ、また磯長谷古墳群とも呼ばれる太子町の王陵群を眼前に控えることから、その被葬者との関係の強い蘇我氏と深いつながりのあった人が葬られていると考えられています。

推古天皇陵

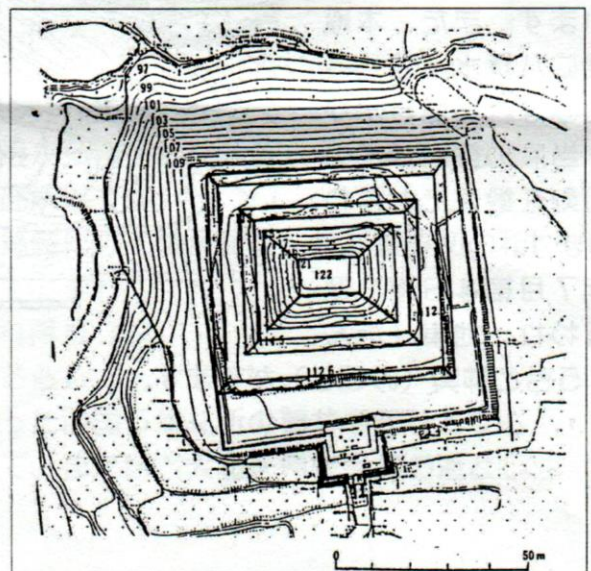
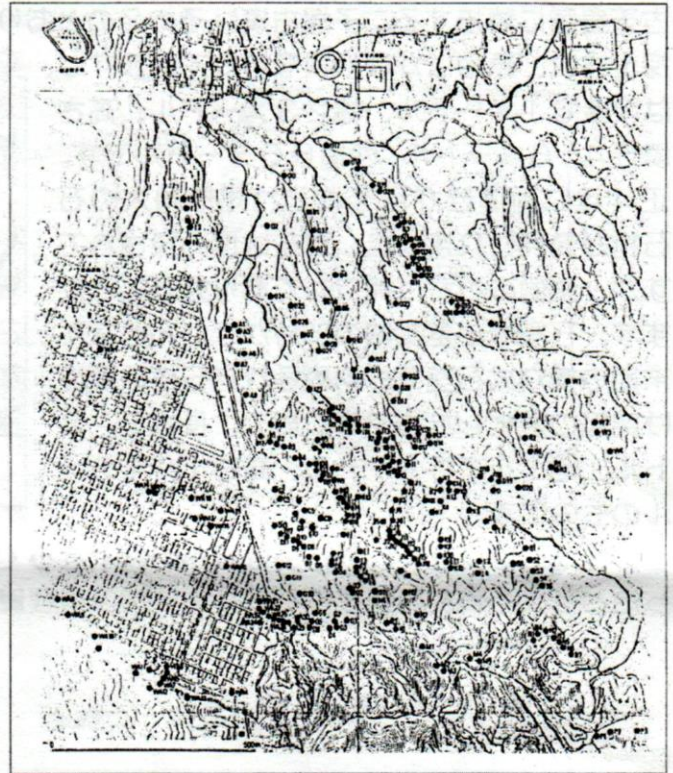
推古天皇は在位5年で暗殺された崇峻天皇の後をついで593年に即位しました。欽明天皇の皇女で敏達天皇の皇后であった豊御食炊屋姫が推古天皇となると、聖徳太子を摂政として起用し、大陸の大国隋との交渉を深めて先進的な政治制度や文化を積極的に取り入れ、内政改革を

すすめ仏教文化を中心とした飛鳥文化の基礎を築きました。

『日本書紀』には在位36年75歳で薨去する際に天皇は「此年五穀登らず百姓太く飢う。それ朕がために陵を興して厚くな葬めそ。すなわち宣竹田皇子の陵に葬るべしと宣りためひき。壬辰、竹田皇子の陵に葬めまつる。」とみえ、先に亡くなった子の竹田皇子の墓に追葬するものとしている。また、『古事記』はその場所を「御陵は大野の岡上に在り。後に科長大陵に遷す。」としています。

推古天皇陵は東西63メートル、南北56メートル、高さ11メートルで、三段に築成され貼石があると言われています。幕末には陵墓改修が行われますが、南側には広い前庭状の平坦地があり、実際にはもっと大きな規模になる可能性があります。

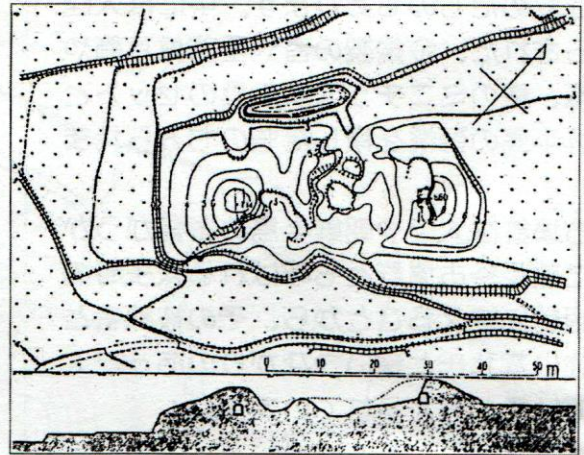
内部構造については不明ですが、文久3年(1863)谷森善臣による『諸陵説』によれば、4.5メートルほどの玄室をもつ石室に2つの石棺があったことが記されています。また、1990年宮内庁の墳丘調査では3段目の南斜面に東西3.5メートルで並ぶ花崗岩の大きな石材が確認され、東側が『諸陵説』に見える石室と考えられおり、その墳丘の形態から東西に2つの石室があるものと見られます。1つの墳丘に2つの石室を持つ古墳は7世紀頃にその例がみられ、二子塚古墳と同様に近親者を葬るために築造されたと考えられています。



二子塚古墳

推古天皇陵に隣接する二子塚古墳はその名のとおりに2つの墳丘が連なった形の双方墳です。著しく採土され、原形はかなり損なわれていますが、規模は全長61メートル、幅23メートル、高さは東墳丘4.6メートル、西墳丘6メートルです。

大正4年に両墳丘からそれぞれ同形同大の石室と石棺が発見されました。現在は埋め戻されていますが、東側の石室は開口しており見ることができます。石室は小型で袖の部分がほとんどなく、最終末期の横穴式石室で、納められた石棺は蓋の縄掛け突起の退化したカマボコ形で、長さ2.3メートル、幅1.16メートル、高さ1.19メートルのものです。



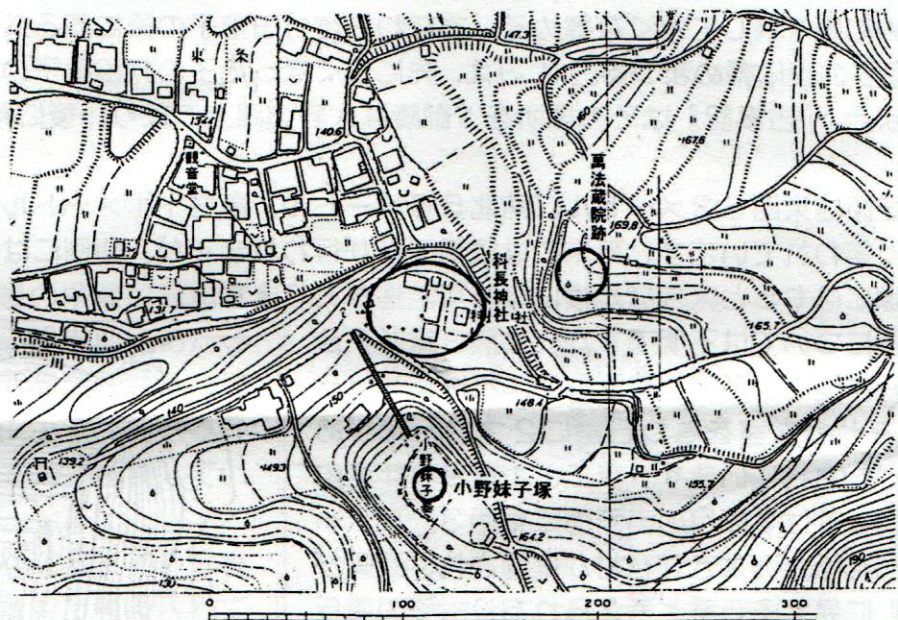
双丘の古墳は数少なく、双方墳は唯一の例となっています。その形態から葬られた人は近親者であったと考えられています。

科長神社

平安時代の『延喜式』に挙げられる由緒ある神社です。級長戸辺命や品陀別命など、八柱の神々を祀るため八社大明神とも呼ばれています。

拝殿は天保10年(1839)の建築で、拝殿前の鳥居には元禄14年(1701)葉室大納言藤原頼孝の筆になる「八社大明神」の額が掲げられています。また、本殿の裏側に八精水(やせみず)と呼ばれる湧き水があり、当麻の鍛冶がこの水で刀剣を鍛えたと言われています。

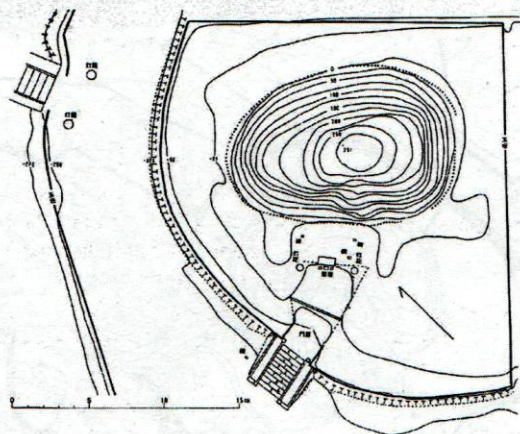
毎年7月第4日曜に例祭が行われ、地車(だんじり)5台と神輿(みこし)がでます。



小野妹子墓

小野妹子墓は科長神社前から石段を登った山腹の平坦地にあります。塚の規模は東西15メートル、南北11メートル、高さ3メートルあまりの楕円形で、すその周りには後世の貼り石が巡らされています。

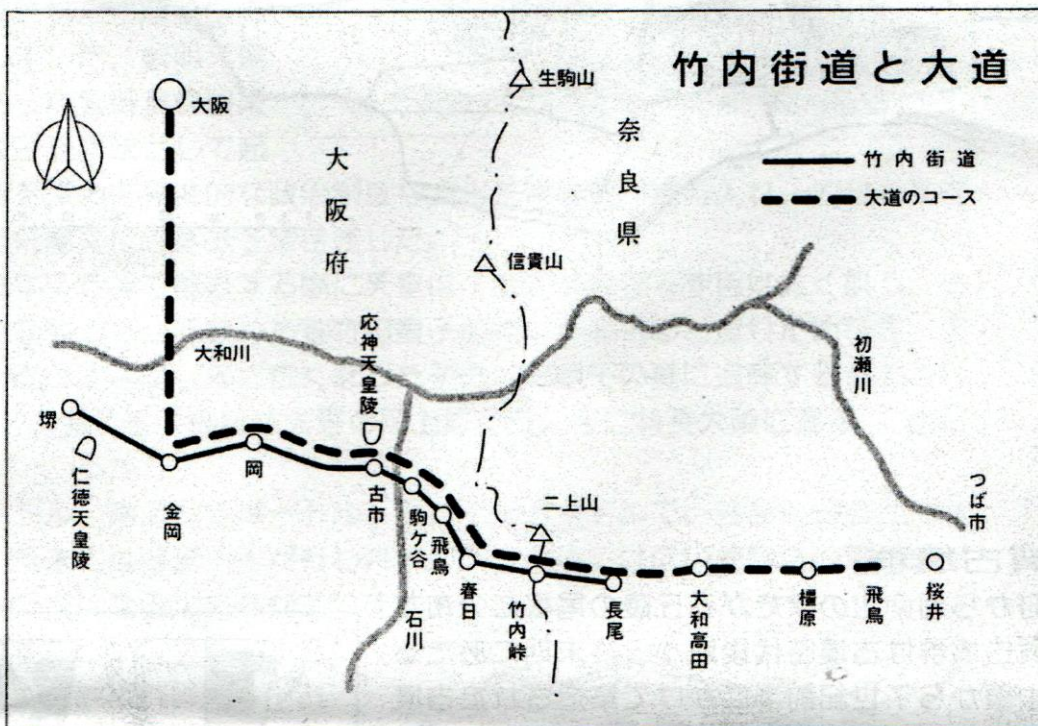
小野妹子は7世紀の始め、推古天皇の時代に聖徳太子が中国の隋へ使者として送った遣隋使ですが、その明確な記録はなく、その墓がこの太子町、磯長の地に伝えられる理由は明らかではありません。ただ小野妹子を華道の創始者として祀る池坊は、毎年6月30日にこの墓前で盛大な道祖祭をとり行っています。



竹内街道

竹内街道は堺市の大小路から金岡、松原市の岡、羽曳野市の野々上や古市を抜け、太子町を通って二上山の南竹内峠を越え、奈良県葛城市当麻の長尾神社に至る、全長26キロの街道です。

『日本書紀』の推古天皇21年(613)に「難波より京に至る大道を置く。」と見え、この難波津から飛鳥の都「小治田宮」へゆく日本最古の官道のルートが一部竹内街道と重なるものと考えられています。難波津から南



下し、金岡あたりで竹内街道ルートをとおり、長尾神社付近から奈良盆地を横断する横大路を通って飛鳥にでます。これが竹内街道を「最古の国道」と呼ぶ所以です。

街道沿いは、これにふさわしく推古天皇をはじめとする飛鳥時代の王陵が並び、わが国最初の和歌集『万葉集』の歌人らもおとすれ

大坂を 我が越え来れば 二上に もみぢ葉流る しぐれ降りつつ

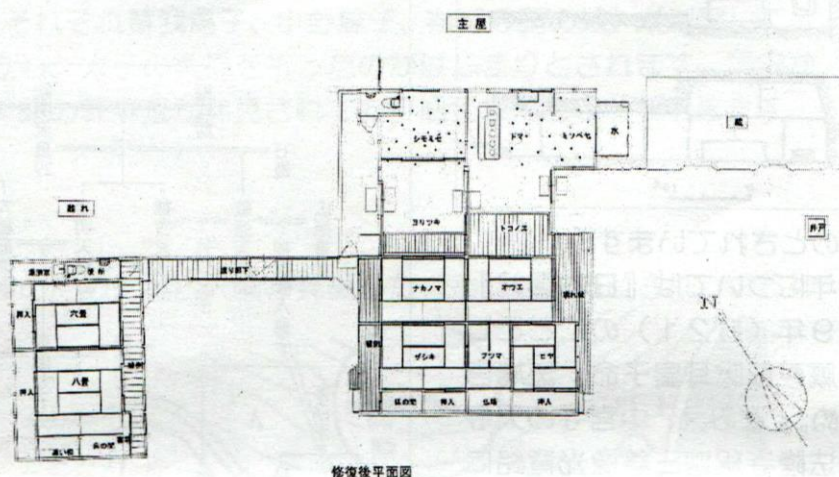
飛鳥川 もみぢ葉流る 葛城の 山の木の葉は 今し散るらし

などの優れた歌を残しています。また、その後に盛んとなった西国5番札所の葛井寺をひとつとする西国巡礼や伊勢参り、大峰参詣のための巡礼街道として、また堺と大和を結ぶ経済の道として賑わいました。

旧山本家住宅

河内と大和を結ぶ竹内街道の風景になくはならない「大和棟」の民家。瓦屋根に茅葺きがのるのが特徴的で、国の登録文化財となっています。

大和棟の主屋は構造手法から江戸末期の建築とみられ、かやぶきの切妻屋根の両側を本瓦葺きとし、妻部分は高壁造りという特徴的な外観となっています。庭を挟んで西側にとりつく離



れは入母屋造の棧瓦葺きで、大正元年（1912）の棟札が残ります。東の土蔵は昭和27年に建てられたもので、かつては庭を取り巻くように東の倉庫あたりにも2つの土蔵がありました。

孝徳天皇陵

孝徳天皇は645年に中大兄皇子と中臣鎌足が行った大化改新後に即位した天皇で、大化改新で功績のあった中大兄皇子を皇太子、蘇我倉山田石川麻呂を右大臣、中臣鎌足を内大臣して政治の刷新をはかりました。

蘇我氏などの旧来勢力の強い飛鳥を離れて難波宮に遷都しましたが、中大兄皇子や妹の間人皇后と弟の大海人皇子などの側近が大和へ戻り、蘇我倉山田石川麻呂も謀略によって自害して果て、白雉5年（654）天皇は失意のうちに難波宮で薨去しました。『日本書紀』には、その年のうちに大坂磯長陵に葬られたことが記されています。

陵は丘陵の南斜面に築かれた、直径32メートルの円墳もしくは八角墳とみられ、古記録によれば洞窟の中に石棺があったとされます。

道の駅「近つ飛鳥の里・太子」

道の駅「近つ飛鳥の里・太子」はかつて遣唐使や大陸からの一行が往来し栄えていた「竹内街道・国道166号」のゲートステーションとしてオープンしました。

ハイキングやドライブの途中に道の駅ならではの観光情報をキャッチしたり太子町の特産品を手にとることができます。毎週土・日曜日には新鮮な野菜のならば朝市が開催され、季節には特産のブドウが並びます。

太子町立竹内街道歴史資料館

竹内街道と太子町の歴史を紹介する施設として平成5年3月、街道沿いの太子町大字山田大道にオープンしました。

展示室は2つあり、第1展示室では竹内街道について「石の道」「最古の官道・大道」「太子信仰の道」「庶民の道」の4つのテーマに沿って展示解説しています。また、竹内街道の歴史の幕開けから現代に至るまでを映像機器・マジックビジョンを使って分かりやすく解説しています。

第2展示室では太子町の歴史・考古・民俗などに関する資料を中心に展示しています。

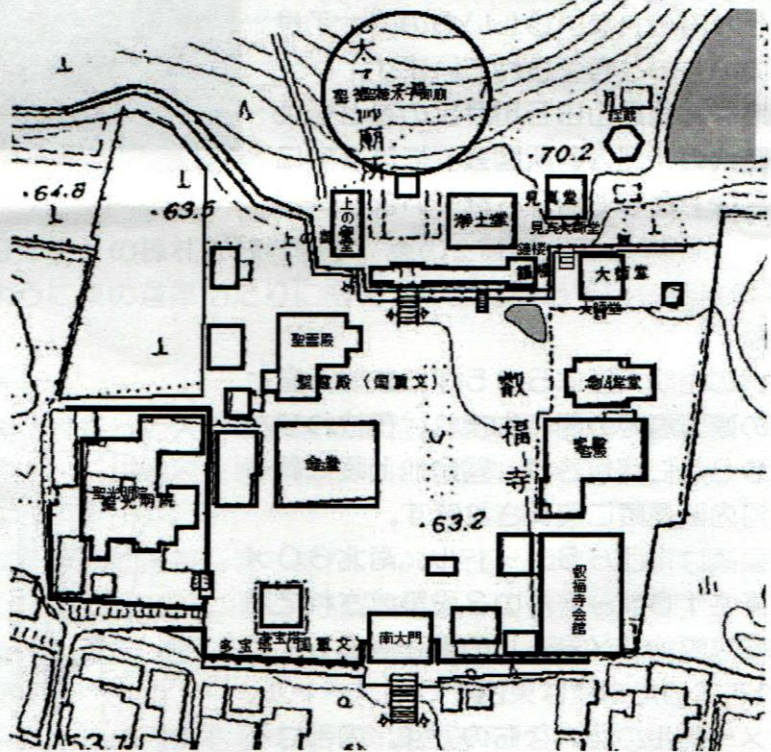
西方院

浄土宗寺院で、本尊は聖徳太子御作の阿弥陀如来像で、寺伝によれば聖徳太子の死後、その乳母であった月益姫、日益姫、玉照姫（それぞれ蘇我馬子、小野妹子、物部守屋の娘）が剃髪して、善信、善蔵、恵善となって堂宇を建立し、太子の冥福を祈ったのがはじまりとされます。境内からは法楽尼寺、久安5年（1149）銘の軒平瓦が発見されており旧名を知ることができます。

叡福寺

寺伝によると太子の死後、その追悼のために推古天皇が発願したことに始まるとされ、のち神亀元年（724）に聖武天皇が法隆寺になって伽藍を大きくし、12世紀後半には平重盛により堂塔の大修理が行われたと伝えられます。

貞和4年（1348）には吉野を目指す高師泰の軍により罹災し、また天正2年（1574）には織田信長の兵火により全山消失しましたが、境内に散在する真っ赤に焼けた礎石はこれを物語るものです。その後、豊臣秀頼の聖霊殿〔慶長8年（1603）：国指定重要文化財〕の再建を皮切りに太子御廟前の再興がすすめられ、江戸時代の中頃までに多宝塔〔承応元年（1652）：国指定重要文化財〕、金堂〔享保17年（1732）：府指定文化財〕が再建され、おおよそ現在の姿に整備されました。

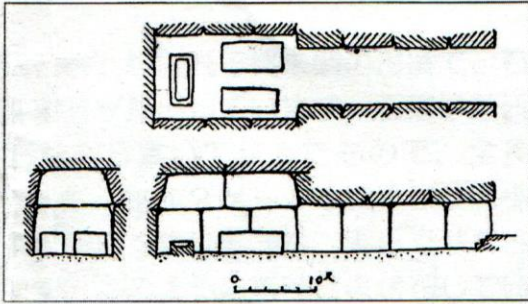


これら歴史的建造物のほか寺宝には絹本着色文殊渡海図（国指定重要文化財）、高屋連枚人墓誌（国指定重要文化財）を始めとして太子像などの太子信仰に関するものも多く残されています。

聖徳太子御廟

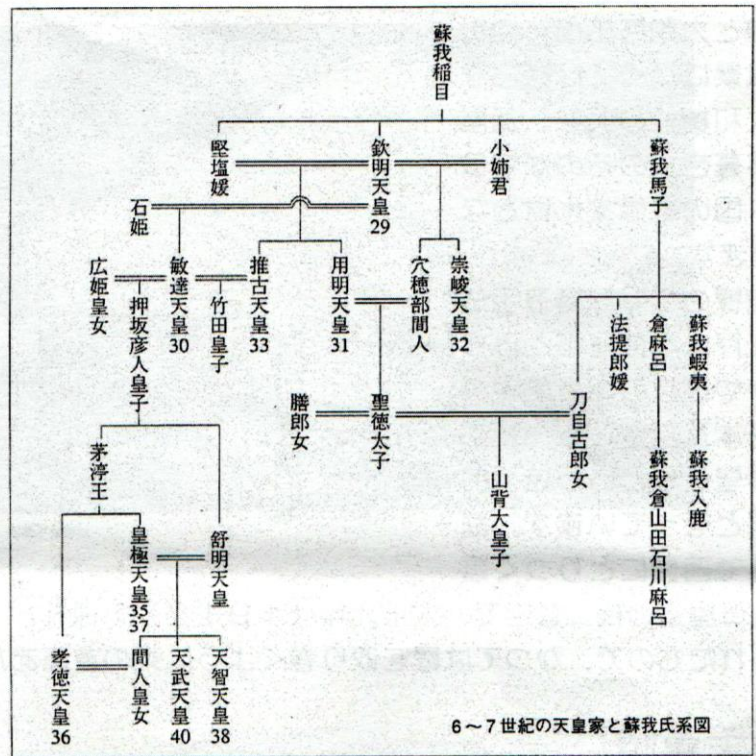
聖徳太子は敏達元年（572）に用明天皇と穴穂部間人皇女との間に生まれ、20歳で叔母である推古天皇の即位にあたりその摂政となりました。

聖徳太子御廟はその聖徳太子とその母穴穂部間人と妻膳郎女が葬られているとされ、丘陵の南斜面に築造された直径およそ50メートル、高さ10メートルほどの円墳です。その周囲には境界石と呼ばれる立石を2重に巡らせており、内側の凝灰岩製のものは鎌倉時代、外側の花崗岩製のものは江戸時代に作られたものです。内部には横穴式石室があり、明治12年の御廟の修理の際の宮内省、大澤清臣の実見記録や同じころの富岡鉄斎の記録をもとに、考古学者梅原末治の石室想定図が公表されています。これによれば、全長およそ12メートルの花崗岩の切り石を利用した石室で、玄室には奥に穴穂部間人皇女の石棺、前に2つの棺台があり、左が膳郎女で右が聖



徳太子のものとされています。

太子の没年については『日本書紀』には推古29年(621)のこととして「夜半に厩戸豊聡耳皇子命、斑鳩宮に薨りましぬ。」とみえ、中宮寺の天寿国繡帳銘や法隆寺釈迦三尊像光背銘には太子の没年を推古30年(622)2月22日としています。またその場所について『日本書紀』に「上宮太子を磯長陵に葬る。」とし『延喜式』や『聖徳太子伝暦』などでも「磯長」もしくは「科長」と記録しています。



和みの広場 (松井塚古墳石棺・尼ヶ谷古墳)

松井塚古墳石棺

昭和33年に山田の松井氏宅で井戸を掘る際に発見された古墳に納められていた石棺です。全長2.5メートル、幅1.3メートル、高さ1.68メートルの巨大な家形石棺で、二上山の凝灰岩を加工して作られており、周囲のいたるところに製作時のノミの痕が残されています。

通常の家形石棺と違い小口部分に横口を作りつけていることから横口式石槨とも言われており、飛鳥時代の古墳に用いたものと考えられています。

発見当時には内部から多量の皿や鉢などの土器とともに人骨が発見されていますが、石棺の巨大さから葬られた人はかなりの高い身分であったと見られます。

尼ヶ谷古墳

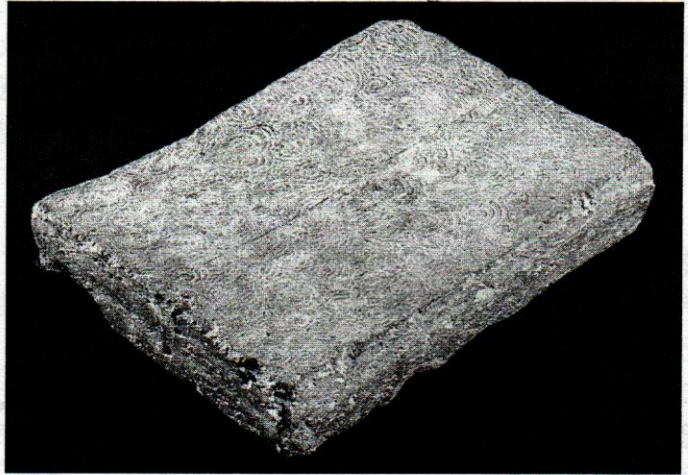
平成12年に付近の町道の敷設に伴う発掘調査で発見された尼ヶ谷古墳の石室です。古墳はもうありませんが広場を整備するにあたって石材を移築しました。

玄室の左側壁と羨道部の1~2段目が残されているのみでしたが、全長およそ10メートルに及び、玄室は長さ5メートルで幅1.2メートルの規模をもつことが分かりました。石室内では凝灰岩の石棺片のほか金製の耳飾やガラス製の管玉が発見されました。これら発見された遺物から推古元年(593)に磯長に改葬された用明天皇陵や聖徳太子御廟が築かれる以前の6世紀後半頃にすでにこの地に古墳が築かれていたことが明らかになりました。

仏陀寺古墳

横口式石槨と呼ばれる終末期の古墳で、石槨の天井部分が露出しています。石槨は凝灰岩の一石を割り貫いて作ったもので、全長2.5メートル、幅1.2メートルあります。小口部分より四角く割り貫かれ、扉石で蓋がされています。このように形は石棺状をしていますが、土中にそのまま埋められ石槨とする古墳は、南河内でも特に太子町周辺を中心にた一帯にしかみられない珍しいもので、7世紀の後半頃のものと考えられています。

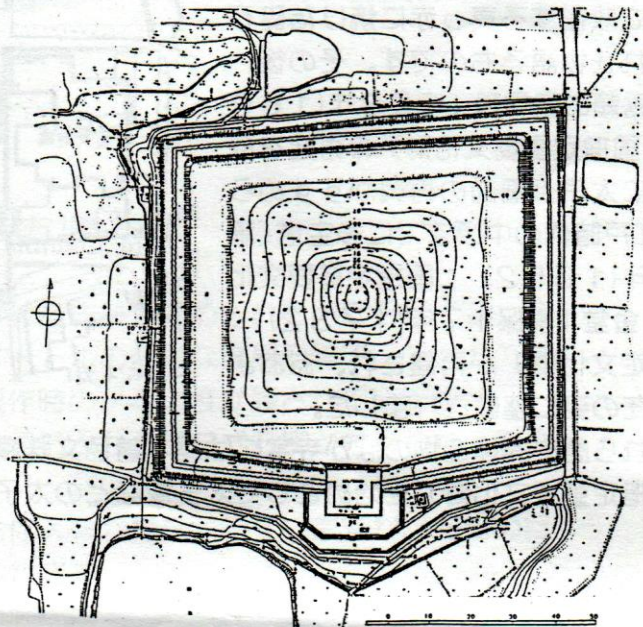
この古墳は蘇我倉山田石川麻呂の墓と伝えられ江戸時代の「河内名所図会」にはすでに「山田麻呂塚」として紹介されています。



用明天皇陵

第31代の用明天皇は585年に欽明天皇と蘇我稲目の娘堅塩姫の間に生まれ、在位わずか2年、593年に病没され、磐余池上陵に葬られ、後に河内磯長陵に改葬されます。

用明天皇陵は東西65メートル、南北60メートル、高さ10メートルの3段築成された方墳で周囲には幅約7メートルの濠を巡らしています。これを含めた規模は東西100メートル、南北90メートルの巨大なものです。内部は不明ですが、古文書により墳頂に天井石が見えていたとされ、大和の石舞台古墳と類似していることから7世紀前半に築造されたものと考えられています。

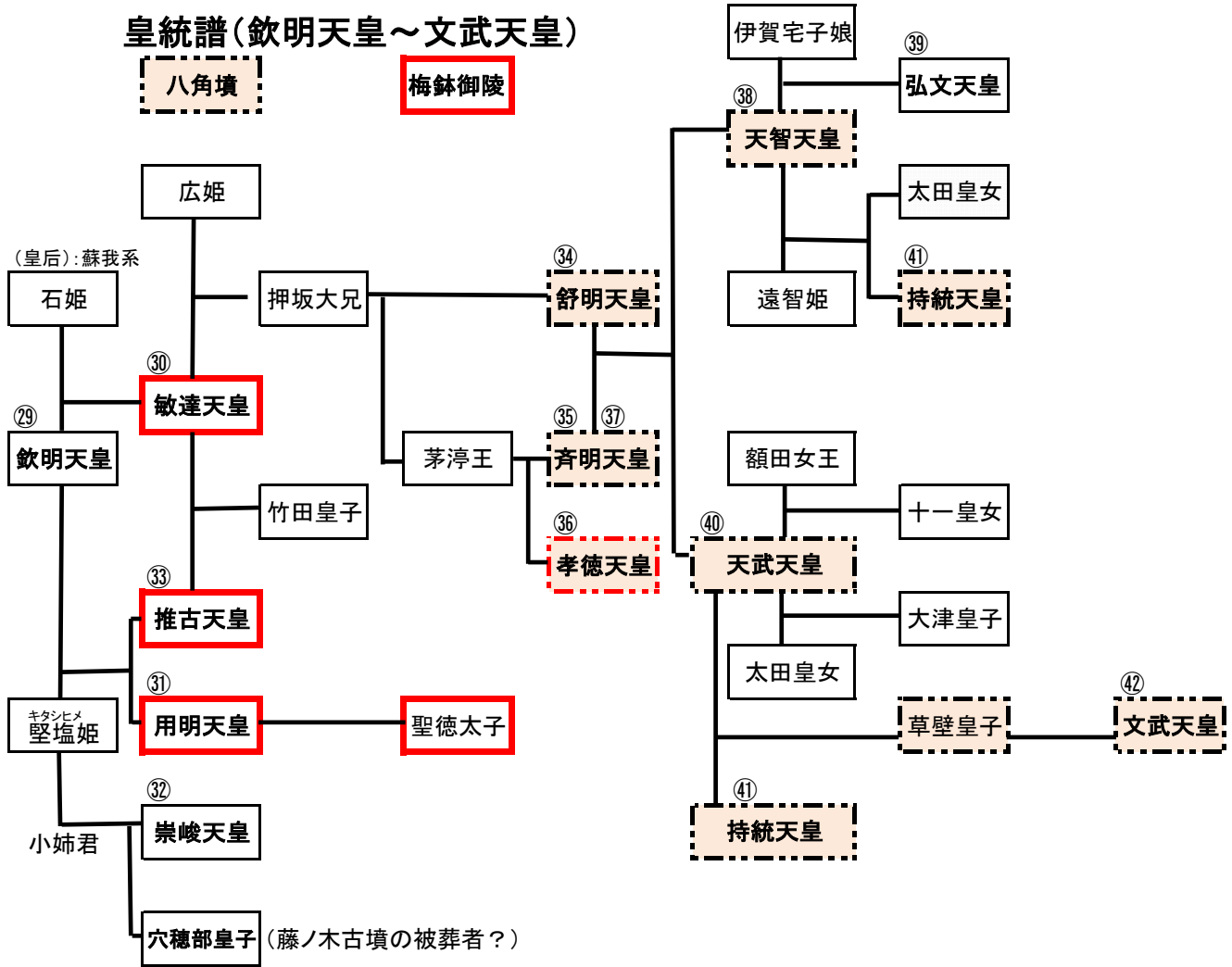


伝蘇我馬子墓

大臣蘇我馬子は推古34年(626)に亡くなり、桃原墓に葬られたとされています。現在はその宮殿であった嶋宮に近接する石舞台古墳がその有力候補とされていますが、当墓は江戸時代の「河内名所図会」にすでに「蘇我馬子塚」として紹介されています。現在塚はほとんどありませんが、ここに建てられた石塔は13世紀中ごろの形式をもつもので、この伝承の成立が平安時代中期に成立した「聖徳太子伝暦」の太子の前にかしずく我が姿の像を我が墓前に掛けよと遺言した記述との関わりが考えられています。

梅鉢御陵と関連する天皇の系図

梅鉢御陵は前方後円墳が終わり八角墳に移行する時期に当たり、諸説があるが蘇我氏の企画と推定される。ここは蘇我氏の領地であり、新たな大王家の墓所として、大陸からの知識で新しい形を模索したのでは無いか。費用の掛かる大型の前方後円墳を止めて、方墳そして最終的には、八角墳に移行した。



参考: 梅鉢御陵

磯長谷古墳群は宮内庁から治定されている天皇陵4基(敏達天皇陵・用明天皇陵・推古天皇陵・孝徳天皇陵)と、聖徳太子廟など約30基からなる古墳群である。前方後円墳の造営が終了した後の6世紀中頃から7世紀中頃にかけてのものと思われる。(ただし、敏達天皇陵は磯長谷では唯一:最後の前方後円墳である。)

天皇陵4基と聖徳太子廟の5つの古墳は、梅の花びらになぞらえて「梅鉢御陵」(うめばちごりょう)と総称される。なお、この地一帯は二上山山麓の斜面が幅広い谷地形を作っており、磯長谷と呼ばれている。さらに皇族の陵墓が集中していることから、「王陵の谷」とも呼ばれる。

- 敏達陵(585没)が梅山古墳になるまで、14年間
- (591)石姫(欽明の皇后)陵:太子西山古墳に敏達を合葬
- cf. 推古の改葬計画:推古は蘇我系を排除
- 推古元年(593)同母兄:用明を磐余から太子西山古墳に改葬
- (612)堅塩媛(皇后扱)を檜隈大陵:欽明陵に合葬
- (620)夫:敏達を檜隈陵:梅山古墳に改葬(大阪大学 高橋照彦 説)

歴代天皇(梅鉢御陵関連)の御陵と古墳の関連

古墳名	叡福寺北	五条野丸山	梅山	太子西山	春日向山	山田高塚	植山	忍阪段ノ塚	山田上ノ山	車木ケンノウ	牽牛子塚	岩屋山
墳形	円墳(楕円)	前方後円	前方後円	前方後円	方墳	方墳	前方後円	八角墳	八角墳	円墳	八角墳	八角墳
宮内庁治定	聖徳太子		欽明	敏達	用明	推古		舒明	孝徳	斉明		
御陵名	シナガノミササギ 磯長陵	畝傍陵墓参考地	ヒノクマノサカイミササギ 檜隈坂合陵	コウチノシナガクノオノミ 河内磯長中尾陵	コウチノシナガハラノミササギ 河内磯長原陵	シナガノヤマダノミササギ 磯長山田陵	国史跡	オノサカノウチノミササギ 押坂内陵	オオサカノナガノミササギ 大阪磯長陵	オチノオカノエノミササギ 越智岡上陵	国史跡	国史跡
判定	○				○	○		○	○			
古墳の主	聖徳太子	欽明	敏達	石姫(欽明皇后)	用明	推古	空墓	舒明	孝徳	?	斉明	空墓
改葬		堅塩 ← 堅塩	敏達 ← 敏達		用命 磐余(磐余池上陵)から改葬	推古 ← 推古					斉明 ← 斉明	

敏達陵(585没)が梅山古墳になるまで、14年間

(591) 石姫(欽明の皇后)陵:太子西山古墳に敏達を合葬

cf. 推古の改葬計画:推古は蘇我系を排除

推古元年(593)同母兄:用明を磐余から太子西山古墳に改葬

(612) 堅塩媛(皇后扱い)を檜隈大陵:欽明陵に合葬

(620) 夫:敏達を檜隈陵:梅山古墳に改葬 (大阪大学 高橋照彦 説)

歴史年表と歴代天皇(梅鉢御陵関連) **梅鉢御陵(磯長谷:太子町)**

代	天皇	在位期間	父	古墳/墳形・場所				備考
				御陵名	宮内庁治定	m	考古学推定	
29	キンメイ 欽明	539～571 <small>ヒノクマノサカアイノミササギ 檜隈坂合陵</small>	継体天皇	前方後円	140	前方後円	318	
				梅山古墳		五条野丸山古墳		
				飛鳥		橿原市		
30	ヒノタツ 敏達	572～585 <small>コウチノシナガノナカノミササギ 河内磯長中尾陵</small>	欽明天皇	前方後円	93	前方後円	140	
				太子西山古墳		梅山古墳		
				河内		飛鳥		
31	ヨウメイ 用明	585～587 穴穂部との子が聖徳太子(厩戸皇子) <small>コウチノシナガノハラノミササギ 河内磯長原陵</small>	欽明天皇	方墳	63x60			
				春日向山古墳				
				河内				
32	スニシ 崇峻	587～592 <small>クラハシノオカノミササギ 倉梯岡陵</small>	欽明天皇	小円墳	15	方墳	46x42	
				天皇屋敷		赤坂天王山古墳		
				桜井		桜井		
33	スイコ 推古	592～628 <small>シナガノヤマダノミササギ 磯長山田陵</small>	欽明天皇	方墳(長方形)	63x56	方墳(長方形)	40x27	
				山田高塚古墳		(改葬前)植山古墳		
				河内		橿原市		
34	ジョウメイ 舒明	629～641 <small>オシカノヒコヒノオホミノウ 押坂彦人大兄皇子 (敏達の皇子) オシカノウチノミササギ 押坂内陵</small>	推古天皇	八角墳	42	前方後円形		
				忍阪段ノ塚古墳				
				桜井				
36	コトク 孝徳	645～654 <small>オオサカノシナガノミササギ 大阪磯長陵</small>	茅渟王	八角墳	30			
				山田上ノ山古墳				
				河内				
35	コウキョク 皇極	642～645	茅渟王					
37	サイメイ 斉明	655～661 皇極の重祚 <small>オチノオカノミササギ 越智岡上陵</small>	推古天皇	円墳	45	八角墳	22	
				車木ケンノウ古墳		牽牛子塚古墳		
				飛鳥		飛鳥		
	ショウトク 聖徳太子	621没 推古天皇の摂政 <small>シナガノミササギ 磯長陵</small>	用明天皇	円墳(楕円)	54x45			
				観福寺北古墳				